



SHERIDAN論考：その悲劇的一面について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 榎, 純孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001490

SHERIDAN 論 考

—その悲劇的一面について—

榎 純 孝

釧路分校英文学研究室

Sumitaka ENOKI

A STUDY OF SHERIDAN

—ON HIS TRAGIC PERSONALITY—

AUTHOR'S ABSTRACT

Sheridan has often been regarded as not only light and vain but easy and indolent because of the appearance of his career and dramatic works. Such a way of looking on him as this is, of course, true to some extent, but not proper altogether. His trouble bred unconsciously at heart was revealed in an abnormal mode of living rather than serious meditation. He, as it were, fled away out of the agony of self communion, where lies a blind spot through which we look into his character. It is very difficult to catch his real inward feeling through his light comedies. Such effort is generally said to be made in vain. But I don't believe there is no relation at all between the author and his works, as in the case of Sheridan. When we think of Sheridan in his original plays as well as in his real life, we can see his weak nature which caused him so much torment in facing tragedy in life. That weak side I'd like to consider as his tragic personality, which is the motif of this essay.

SHERIDAN 論考

—その悲劇的一面について—

R. B. Sheridan を語るに当って、その外面的活動の華やかさ、また行動性の豊かに溢れた生活から、極めて具体的に把握できそうにみえて、実は甚だ掴み切れぬのが Sheridan の内面的真実である。「Sheridan のあらゆる伝記作家の伝記を、退屈・嫌怠に陥らせたのは、Sheridan その人に責めがある。」¹⁾と Butler は眩き、Dr. Johnson は「陰の多い果敢ない人物」²⁾と評し、その書簡集の編者 Cecil Price は「評価するに困難なほど矛盾に満ちた性格」³⁾と嘆いたことは、千変万化の浪漫的な生涯の歩み、及びその裏面の心情を探ろうとすると、等しく感ずるところである。少くとも、その作品や経歴から極く安易に想像されるような、軽佻浮薄な人間を強調し過ぎてはならない。しかし一般には、そうした外側からだけ見た印象の強さに災いされ、文学史の一頁に

必ずやその紹介はあっても、人間的な追求の試みを、他の同列の作家ほどには迫らぬ体ものになっている。勿論それも、Sheridan その人の責めに帰せられることは、既述のとおりでもあろうが、だからといって、その人間的な内面への接近を、怠ってよいことにはならない。劇作家として、また Drury Lane の所有に係わる実業家として、また Whig の領袖の一人である政治家として、時流を極めたその境涯、また、それ等にまつわる挿話は、一面的興味にのみ Sheridan を押しやるのに、大いに与って力があつたようである。とりわけ厄介なのは作品からは、他の作家のように、作者の内面的肉薄の契機が捕え難いことである。その描く世界が喜劇、特に風習喜劇の流れを汲むものであることは、Sheridan の思想なり、人となり等についての追求を、一段と阻んでいる。第一、Sheridan に何であれ、思想らしい思想があつたのか、それですら具体的には掴みにくい。固より政治家として、アメリカ独立戦争やフランス革命に同情を抱き、母国アイルランドの自由に尽瘁し、カトリック解放に情熱を燃やし、大概野党にあつた彼を、所謂、自由主義者あるいは革新的進歩主義者と呼ぶことは可能であるが、そういう呼称で呼んだとき、ひどく場違いな違和感にも触れてくるのが、Sheridan の人間でもあるようだ。

It would be little less foolish than to compare Sheridan's prologues and occasional verses with the *Allegro* and the *Penseroso*. Not to that region or near it did he ever reach. It was not his to sound the depth of human thought or mount to any height of fancy. Rosalind and Prospero were out of his reckoning altogether; but for a lively observation of what was going on upon the surface of life, with an occasional step a little way ————— but only a little way ——— beyond.⁴⁾

確かにこの感概は、Sheridan の作品を読んだ誰もが抱くところであろう。しかも十八世紀中葉の未だに戯曲文学としては確立していなかった時代の作品を、とりわけ、dramatical であるより theatrical なその作品を、舞台でではなく書齋で接するとき、Mrs. Oliphant の感概は、一層鮮明に浮出してくるであろう。しかし、これを全面的に唯受入れるだけでは、Sheridan の人間を追求せんとする目的は、少くとも作品の面からは、一步も踏み入ることを許されず、創作以外の処だけで果さなければならぬ。これが今迄、とかく Sheridan の研究に、魅力を感じさせなかった有力な原因であつたように思う。Mrs. Oliphant の述懐には大いに共感を抱かざるを得ないが、やはり、実人生との係わり合いも含めて、作品からも、Sheridan の内奥に迫る一端を得たいと思う。



ここで、Sheridan は、従来、どのように見なされていたか、一瞥してみたい。このことから Sheridan の人間像を解明するに際しての問題の所在が窺えるように思われる。Mrs. Oliphant は結論的に Sheridan を評して、東の間に消えてゆく巨大な美しい花火⁵⁾に譬えているが、これは Butler のクリスマス・ツリーの喩え⁶⁾と相俟って、誠に象徴的な評と言わざるを得ない。この両者に含まれる共通の印象は、衝動に駆られて現れる華々しさと瞬時にして移ろう果敢ない忘却とであろう。“His life is a romance.”⁷⁾という言葉の意味するところも、その凝視の方向を等しくするものである。このような感概を忍ばせる背後に当然予想されるように、才能ある閃き、奇抜、いわゆる人柄の魅力、例えば、機智に富んだ会話の妙、優雅な態度などの洗練された社交性等が、Sheridan の特徴とされている。しかし、そのどれもが底の浅い人生観や、人間性に対する洞察力

の弱さからくる、気楽で安易な生活感覚と結びつけられ、更にここから怠惰、無思慮、自己耽溺の蔽も指摘され、己の描く character, Charles Surface にもなぞらえられてくるのである。また華やかな社交界に憧れる心情は、貴候社会に伍したがる虚栄心にも通じ、節操や憂国の心情を明らかにしながらも、Sheridan の政治家としての声望は、どこか、愛国心や公共心とは違ったところで造られているように感じられる。気軽に世間を渡り歩き、恋も富も名声も一度は手中に収めながら、やがて落魄の晩年に至った、およそ思想性に乏しいその生活は、幾分の感傷を以て人に迫るが決してそれ以上にはならないのである。

Moore の伝記⁹⁾についても、述べるところは大体上記と同様である。生れつきの遅滞の習慣、一応功成り名遂げてからの虚栄心に溢れた行動、またそれに伴う派手な生活等を顧み、不幸にして余りに魅力的であった Sheridan の社交性に言及する。更に、規則性の欠如が悪徳であることを、Sheridan ほどに具現したものは無いと言い、⁹⁾ その生涯は、ひたすら反省沈思のないものであったことを痛感する。しかし Moore は、このような従来 of Sheridan の評価に加えて、種々、暖かい配慮も忘れない。劇作家また政治家として、一般の推察とは裏腹に大変な努力家で、周到な準備に充分時間をかける性質であったこと、また、その生前の大部分には疎んじられながらも、父ことに孝養を尽したこと、政治家としては、一貫して清潔で節度ある姿勢を以て、愛国の情に終始した等を、声を大にして言う。その思いやりは、Sheridan にあっては密接不離といわれる欠陥、脆さや無規律をも、彼を取囲む時代環境にあることを述べて寛恕を求め、いわば、合金の魅力を発見して、この一卷を結んでいる。これは一つには、Moore が Sheridan の遺族の要請によって、この伝記を著した、¹⁰⁾ とも言われているが、その辺の配慮もあったのかもしれない。ともあれ、その外面的記述、特に政治活動期のそれに多くの頁を割いてはいるが、Sheridan への内面的肉迫の物足りなさは、なまじ大部のものであるだけに、一層苛立たしさを覚えさせる。

“ ‘I do not know,’ wrote Lord Byron to Thomas Moore, then beginning his own seven years’ task, ‘any good model for a life of Sheridan but that of Savage.’ ”¹¹⁾ に挙げられた Sheridan の生活賦の基調は、Rhodes の描くところと大体一致している。しかも、その書名の示す Harlequin¹²⁾ を、如実に舞台に乗せながらも、Harlequin なるが故の哀しさに迫ろうとはしなかった。従って、その記述全体から受ける印象は、依然、道化の皮相的華やかさでしかないのである。

Sheridan の生きた時代の、乱脈で騒然とした世相を写して特徴はあるが、Sherwin の伝記¹³⁾ は、在来の Sheridan の描写から一步も出ず、徒らに信憑性の不確かな奇聞・奇談の類に紙面を割いて、内面的接近を少しも心掛けようとしなかったのは、伝記として最も遠去かったところにあると言えよう。

Sheridan's Dramatic Works and Life による記述では、軽薄安易で怠惰社会の人間とみなされてきた Sheridan に対し、思いやりある態度で、従来像の修正に努力している跡が窺われる。その意図は分るが描くところは陳腐で、何等新しい発見も可能性ある推測も見当たらない。

多くの伝記作家が異口同音に唱える、wit ある劇作家であり、雄弁家であるという Sheridan 像を、Butler は大胆にも否定する。しかも、兎角顧みられることの少かった内面的追求に、真正面に取り組んだその意図は、達成の度合いもさることながら、大いに評価されてよい。Sheridan が芸術家固有の内面的関心に欠如していることに着目し、主として、それを、人間と悲劇性という関連において捉えようとする。その論旨の過程で、多少独断や背景的事実の無理な論証はあるが、今迄殆んどなおざりにされてきたこの点での努力には、本論にあっても多くの示唆を受けるものがあ

た。このことは、特に Sheridan のように華麗な、所謂ドラマチックな生涯に終始した人間の 場合、とかく表面的行動のケバケバしさに目を晦まされて、見逃し易い一面でもあり、往々にして従来の伝記作家の盲点でもあった。もとより Sheridan から深遠な思想を発見することは不可能ではあるが、華やいだ行動の陰にある哀しみをまで、皆無であったとは言い切れない。“‘The real Sheridan, as he was in private life, is irrevocably gone,’ said the *Encyclopaedia Britannica* of 1886,”¹⁴⁾ の嘆きも、実に如上の点にこそ秘められているのであって、本論でも出来得る限りの接近を計ってみたいと思う。

また Sheridan の作品から受ける一般的印象は、敍上の人間像と軌を一にする。むしろ、作品の醸し出す雰囲気は、作品でしか接し得ない後世の読者にとって、多分に、Sheridan その人の映像に寄与していることであろう。“Bath is the hotel of the eighteenth century”¹⁵⁾ と呼ばれた Bath に、wit と humour に富む享楽遊惰の世界は、実生活上での経歴と交互に作用し合い、人であれ作品であれ、同様のイメージを以て牢固として迫るのである。そこで、人間性に対する深い洞察をを心掛けない Sheridan の作品のようなものからは、その論議分析によって、作者その人の一面を探ろうとすることの無益が説かれるようにもなってくる。¹⁶⁾ 勿論、同じ演劇でも、人間精神の深い省察や発展を扱う、いわゆるイブセンの問題劇のような場合と同等に論じ、同様の効果を期待することはできないが、全くその作者を作品から切離すことが、Sheridan といえども許されてよいわけがない。彼のような theatrical な効果の強い作品に、作者を探ることの困難も分らぬではないが、全面的に退いてしまうには、余りにその背景は体験に酷似し、登場人物の随所に相似する若き日の Sheridan を発見するのである。だからといって、その事件なり character なりを、直線的に作者になぞらえ、早急に安易な結論を引出すことは、その創造的資質を考えると慎まねばならない。その乱痴気騒ぎの舞台では、極めて間接的にしか作者の一面は現われそうにもないが、それを探りあて何んとか Sheridan の人間像に近づく一助にしたいものと思う。こうした角度から臨むとき、対象になるのは先ず創作劇でなければならない。特にそのなかでも、処女作 *The Rivals* (1775年初演)、代表作 *The School for Scandal* (1777年初演)、最後の創作劇 *The Critic* (1779年初演)の三作には、多々問題が含まれているようである。これ等を舞台正面からではなく、袖幕の陰から見るようなつもりで接するとき、やはり、作者の人となりを探る何かが見つけられそうに思われる。とかく作品は残っても、人は忘却の彼方に押しやられていた Sheridan の、その不遇を恢復する契機ともなれば、と希うものである。



Sheridan の経歴に目をやったとき、この劇的で多様な生涯の中には、幾多の興味ある事実が指摘される。先ず最初に念頭に浮ぶのは、1777年 *The School for Scandal* によって劇作家の地歩を確立し、かくれなき文名を盗いままにした Sheridan が、僅か三年後、事実上創作を捨て文学に背を向けて、何故に政界への一大転換を画したか、ということである。Sheridan にとって、政治は文学と並んで早くから趣味・研究の二大領域をなしており、文学上での一応の名声の達成から、更に新しい分野での野心の成就を夢み、文学とは別の処で才能発揮の場を求めようとした¹⁷⁾ とする Moore の観察は、一般に多くの伝記作家によっても代表される見解であるが、Mrs. Oliphant は更に加え、Sheridan は文学的名声に執着せず、社会的成功をこそ彼の求めたものであって、知性に於てではなく事実に於て第一級の人物たることを望んだ¹⁸⁾、ことを強調する。*The Rivals*

による劇壇への颯爽たる登場以来、貴顕紳士と交わることも多く、その後一貫して貴族社会に憧れを抱き、その模倣に墮したような生活ぶりからは、Mrs. Oliphant の見解を俟つまでもなく、誰しも首肯したくなるであろう。まして当時としては、役者よりどちらかと言えば過小評価されかねない劇作家の身分に、Harrow に学んだ子供の頃から、役者の息子として蔑視されてきた Sheridan が、何時までも馴染むことなく、より大きな勝利感を政界に求めた、とするのは、極めて無理のない臆測である。これを極論して Sherwin は、Sheridan にとって文学は常に政治への道であり、当時の有利な政治情勢を得て、Whig のバラ色の未来に己の夢を託したように述べている¹⁹⁾が、だからといって、それ程単純に言い切れることではない。孰れにしても文学から政治という神秘的転換について、如上の方向に解釈する研究家は多数あり、またそれなりに妥当な推測であるとも思う。特に当時、政界の大事であった Fox²⁰⁾ や Burke²¹⁾ との邂逅は、重要な契機となったであろう。しかし、このような観測を施したとき、具体的に浮んでくる Sheridan の人間、即ち世俗的利欲に若い野心を燃やすといった人物像は、その後の30年余の政治生活の裡で、意外にも利欲に捉われず地道に己の主義・主張に終始した政治家の Sheridan と、多少の齟齬を感じさせないでもない。勿論、名声あるいは榮譽ということだけを有力な転換の動機とみる場合には、幾分説得力に乏しくなるかもしれないが、それにしても、あり余る才能のやり場に困惑を感じ、野心溢れるが如き Sheridan を一般に想像しているだけに、次のような政治家としての態度には、およそ考えみなかった一面として、ハッとした思いを感ずるのではないだろうか。

Disinterestedness is the keynote of Sheridan's public life. He never lobbies for grants in the West Indies, never tries to quarter himself on the pension list or to cross the floor to sit with a triumphant majority.²²⁾

この Sherwin の高い評価は、Mrs. Oliphant による次のより具体的な述懐に基いている。

If the motives which led him to that greatest of areanas were not solely the ardours of patriotism, they were not the meaner stimulants of self interest. He had no thought of making his fortune out of his country; if he hoped to get advancement by her, and honour, and a place among the highest, these desires were at least not mercenary, and might with very little difficulty be translated into that which is still considered a lofty weakness——that which Milton calls the last infirmity of noblemen——a desire of fame.²³⁾

事実、Sheridan は、利欲に捉われぬ政治家として名を挙げれば、まさしく第一等に位するほどで、役職にある間常に疚しいところがなかったようである。彼の長い政治生活の中で受けた唯一の贈与は、Receiver of the Duchy of Cornwall だけであって、1804年前任者の死に際し空席となったこの地位を、長年にわたる奉仕の謝礼として、Prince of Wales²⁴⁾ から提せられたのであるが、その忠実な献身ぶりからすれば、大したものではなかったようだ。また Moore は、上述のことを裏付ける廉直な政治家の事例を、いくつか挙げている。例えば Rockingham 内閣のとき首相逝去に際し、Shelburne 卿のやり方に憤害した Fox の下野をみるのであるが、それ迄 Fox の派に属していた者も、利害を悟り友情を失っても閣内に留まろうとする中であって、Sheridan は利得を離れ、Fox と行動を共にし、²⁵⁾ また1794年、フランス革命の影響、特に過激化していった革命後の対岸の情勢は、英国に於て Whig の脱党者を増すこととなった。この時期、Pitt²⁶⁾ や Burke の勧めに屈し、その多くは世俗的利益に結びつき、役職を受けて政府のポストを満したが、この転向を Sheridan は眉をひそめて烈しく非難する。²⁷⁾ 更に1803年、St. Vincent 卿により、内

閣に尽した努力の報酬として、息子 Thomas Sheridan に Register of the Vice-Admiralty Court of Malta の地位が提供されたとき、Sheridan は自己の政治的立場や、動機の純粋性を保つ意味で拒否したという²⁹⁾。次は政治家 Sheridan の真面目として、Moore からの引用の最後の言葉としたい。

Through all these occasional variations, too, he remained a genuin Whig to the last; and, as I have heard one of his own party happily express it, was "like pure gold, that changes colour in the fire, but comes out unaltered."²⁹⁾

Moore の伝記には意識的に Sheridan を称揚する嫌いがあるので、批判的傾向の比較的強い Rhodes から、その事例を拾ってみたい。1806年 Pitt 逝って Grenville 卿や Fox の主導の下に、新内閣は組織されたが、Fox himself, with many claimants for office, was afraid equally of Sheridan's "independence", and his intemperance. He advised him to accept a patent place of £2,000 per annum, which would have made him independent for life, but which Sheridan had "magnanimity enough, notwithstanding his obvious necessities, to refuse."³⁰⁾ とあって、Sheridan の高潔な一面を覗かせている。

いずれにしても、高度の政治的原理はみられないが、全く意外と言えるほど己の主義・主張に忠実で、改革と自由の方向に一貫し、フランス革命の結果の不味い事態によっても、その態度を変えることなく、大概野党にあって利欲や官位に淡泊な姿勢を堅持したことは、an air of ease and lightness によって代表される、もう一つの Sheridan 像との間に、著しい違和感を生み、ひとかたならず困惑を感じさせるのである。

Rhodes はその伝記で、文学から政界への転換の事情は何も物語ってはいないが、その序で、"Perhaps he had exhausted his mine with *The School for Scandal*. for when he wrote *The Critic* he had narrowed his satire from life itself to the life of theatre."³¹⁾ と述べているが、これを Rhodes の言う、劇作家兼劇場経営者として浪費に終わった無為な生活の表われとしてではなく、30年余にわたる政治生活の一事を以てしても、Sheridan の劇作上の感興の涸渇の説明としては充分だ³²⁾ とする、Butler の考え方に符節を合わせるものとみなしたい。従来、兎角 Sheridan の才能を賞めるに急で、それ以外の処で、転換の動機を求めようとしてきた一つの盲点として、大いに検討してみなければならない。更に Butler は、政界へ押しやろうとする既述のような周辺の情勢を述べる外に、悲劇との関連に於て、Sheridan の心の深部に、転換の動機を探ろうとする独創的見解を随所に披瀝する。つまり、人生に介在する悲劇的一面を凝視することを避け、不満足な妥協で糊塗策を弄してきた Sheridan が、時宛かも相次ぐ近親者の死で恐怖にさいなまれ、作家にとっては忌避することの許されぬ、人生の悲劇性との対決に畏怖の念を抱き、野望に生きることによって、それを逃れようとしたという。"Rather than live 'a slave to the dread of his dart,' Sheridan remembered his early resolves, and turned his thoughts towards ambition."³³⁾ この、非常に独断的ではあるが、これまでの伝記作家が殆んど顧慮しなかった、心の内部に喰入ろうとする態度は、多大な示唆を与えるもののようなのである。あの絢爛と幕を開いて落莫の裡に幕を閉じた Sheridan の、"He was playing leading part in the drama of his times,"³⁴⁾ なる生涯の葛藤のなかに、"Life's but a walking shadow."³⁵⁾ を、はしなくも思い起さざるを得ない。

ついで Sheridan という人間は、その忘却の果敢なさを、特に政治家の場合に、強く印象づけずにはおかない。彼の内奥を探ろうとする場合、欠かすことのできぬ一事である。

Never, indeed, can she (Great Britain) be sufficiently grateful to the few patriot spirits of this period, to whose courage and eloquence she owes the high station of freedom yet left to her;—never can her sons pay a homage too warm to the memory of such men as a Chatham, a Fox, and a Sheridan; who……were yet the saving lights of Liberty in those times. and alone preserved the ark of the Constitution from foundering in the foul and troubled waters that encompassed it.³⁶⁾〔()内筆者註, ……部筆者省略〕

このような Moore の絶賛は、ひとり彼に留まらず、当時の世評に問えばもとより異論もあったが、多くの納得するところでもあった。しかし Butler は Sheridan を求めて国会議事録にも踏入ってゆく。雄弁で印象的なその演説に心慰められながらも、結果的には意外に姿を消してしまっているのに気付く、思わず息を呑むのである。因みに本邦出版の英国通史³⁷⁾を繙いてみると、Pitt, Burke はともかく、Fox は僅かではあれ一応の記載はあるが、Sheridan に至っては全く皆無である。1787年から翌年にかけて、時のベンガル総督 Warren Hastings の弾劾審理における、あの劇的な Sheridan の告発非難は、まさしく生涯の最高峰を極めるものであったが、“Had he died then, the wonder of his fame and greatness would have been lessened by no painful drawback.”³⁸⁾との Mrs. Oliphant の述懐には、肌に触れる真率の響きを感じず、Sheridan の才は、まともな政治的原則に基くというより、機智、発明に発し、地味な努力よりは、とかく人の耳目を聳動させるような面に向いていたこと。また、才子才に溺るの喩えで、八方にエネルギーを費消し、あたら有為の才能をそれに従属させてしまったこと。更に、飽くまでも舞台人としての本質を堅持して、文学を捨てるべきではなかった等、彼の名を消し去るのに与っていた原因は考えられる。特に晩年の暴飲懶惰の生活が及ぼした影響は無視できない。いずれも一面の真実についてはいるが、Sheridan が何故に歴史の舞台から忘れ去られていったのか、その説明としては、依然満されぬ思いが残るだけである。だが、その果敢なさを、どこまでも彼の内奥に求めようと、一貫して Butler は執念を燃やす。ここで Mrs. Oliphant は譬えて、“He is like two men, one of them painfully building up what the other every day delights to pull down.”³⁹⁾と説く。現象的に見れば誠に穿った批評ではあるが、何故そうなるのか、という疑問は、依然として解決されぬまま取残されている。

一方劇作家としての Sheridan が、政治家のように、果敢なく忘却の彼方に追いやられたとは言えない。しかし *The Duenna* によって、*The Beggar's Opera* の63日を凌ぐ75日のロング・ランを記録し、古典的喜劇として、その紛れもない価値を *The School for Scandal* に放った Sheridan が、*The Critic* 以後、全く創作の筆を断ち、専ら翻案劇に固執し、しかも1792年、浪漫的な経過で結婚した最初の夫人の死以降、姿にくずれた駄作に傾いてしまった。観衆の好みや劇場経営のためとはいえ、初期の栄光を汚すものとみなさざるを得ない。このように、前・後半に対比される著しく不調和な劇作活動は、種々物議を醸し、剽窃の非難を不必要なまでに招く一因ともなった。1776年名優 Garrick の後継者として、Drury Lane を支配下に収めたとき、先ず創作の危機を自らもたらし、1780年 Stafford 選出の下院議員としての第一歩は、芸術家として半ば以上の可能性を失わせ、1787年 Hastings 弾劾による世俗的名声は、彼に残る最後の芸術家を決定的に追放した。このような外面的行動性の豊かな Sheridan の動きには、芸術家に相応しい内面的関心は、余りみとることができない。文学者として敢て果敢なさに通ずるこの道を選んだ Sheridan の心奥に依然興味を感じずる所以である。

しかも、こうした Sheridan の波瀾に富んだ生涯は、意外にも一様に悲劇的な結末に彩られて

いる。

'There is no such thing as tragedy,' Dick Sheridan had proclaimed; and now the fourth catastrophe of his life was accomplished. Tragedy had doggedly pursued and finally overtaken him in his home, in his theatre and in his public life; his aesthetic gift had long since deserted him.⁴⁰⁾

1773年4月、数々の話題を巻き起して果された Elizabeth Linley との結婚は、Moore によればその後——意識的にこの種の問題を避けたいが——彼等夫妻には、およそ愛情の危機なぞ訪れたこともなく、約20年に及ぶ結婚生活には、何の破綻も生じなかったようである。これに反して、Butler, Rhodes, Sherwin, Mrs. Oliphant 等は、一様にこの種の問題を取上げ、一時期、彼等夫妻には、そもそもの結婚の経緯を疑わしめるような、かなりひどい破局が訪れ離婚沙汰まで持上り、1792年における夫人の死も、夫への不信、良心の苛責——猜疑と不安と絶望の果ての最後であったようである。

Exasperated by this stupid and outrageous infidelity, Mrs. Sheridan resolved upon separation, but Mrs. Bouverie and Charles Fox succeeded in talking her over, and he was terribly frightened by her behaviour, so that she received him into favour, but even in forgiving him she had "lost all confidence in his professions and promises."⁴¹⁾

夫人の死後二ヶ月と経ぬ裡に、フランス娘 Pamera と恋に陥り、フランス語も録に知らぬ Sheridan が、フランス語の詩をものすべく苦勞し、僅か二週間後にはもう結婚の運びに達したという事は、この間の事情を雄弁に物語るであろう——尤もこの恋には敗れることになるのであるが、こうして彼の最初の愛の結末は悲しみに終わったのである。

劇場経営のことも、その出だしの花々しさに較べ、その終りはひときわ哀れである。1776年 Garrick の後継者として囑望され、二十代半ばで Drury Lane を手にしたとき、世間は Sheridan のその神秘的能力に驚嘆したものであるが、政界に入ってからには頓に劇場への関心が薄れ、1782年から翌年にかけては、シーズン中にもかかわらず、政治に心を奪われて劇場を顧みることなく、1783年9月、遂に義父 Thomas Linley が形式上 Sheridan に代って経営を司ることになった。この後も政治への没頭、濫費を極めた贅麗な生活、また創作の筆を断っては往年の名作もなく、最初の夫人の病い重くなる頃から、経営は一段と不振に陥っていった。

Absence is the main impression he produces on the actors' minds——absence of cash, absence of consideration, absence of business-like habits, absence of every single quality a manager should have, absence in the flesh to obtain cash.⁴²⁾

更に、1809年2月24日における New Drury Lane の焼失は、決定的破滅をもたらしたかに見える。再建委員会を主導する Whitbread は、Sheridan を委員から排し、特殊持株の權益を主張する彼に厳しく、1812年これが最後となった Stafford 選出における落選は、2,000 ポンドの運動費を融通してくれなかったためだと、Sheridan を嘆かせる程であった。過去の累積してきた怠慢の結果は、今や、彼の発明の才を以てしても、如何とも為し難い事態を招いていた。Sheridan は眼前に突きつけられた敗北を、否応なしに認めざるを得なくされたのである。

Sheridan の半生が送られた政治家としての生涯を振り返ってみたときにも、Warren Hastings の弾劾を頂点として、除々に転落の道程を歩んでいったかに見える。1812年彼が議会で最後の演説は、対仏平和交渉の反対によるものであるが、Sheridan の政治的運命を決定したのは、カトリック解放の問題であったともいう。アイルランドに於けるこのカトリック解放の問題は、長年の奉

仕と友情によっても Prince Regent から期待は裏切られ、死後13年カトリック解放法をみるまでは、年来の主張も実現されることはなかった。また1787年、彼が畢生の雄弁によって開始され、一大反響を喚起した Hastings の審理は、1795年に至って漸く結論を得、政治家 Sheridan が最も記憶に結びつく非難の告発は、無残にも斥けられ無罪の宣告となり、Hastings は一転して賞賛と同情を以て迎えらるようになった。後年 Sheridan は Hastings に会った折り、次のような弁解染みた言葉を述べたという。

The part which I took in events long gone by must not be regarded as any test of my private opinions, because I was then a public pleader whose duty it is, under all circumstances, to make good if I can the charges which he is commissioned to bring forward.⁴³⁾

この引用事実に全く間違いがなければ、これは Sheridan の敗北の自己宣言であり、自殺行為的な告白でさえもあろう。更にまた政界へ入る以前から、その人柄と政治家としての魅力に敬愛措く能わざるものを感じ、終始一貫、影の形に添う如く行動を共にしてきた Fox との間柄も、1802年頃から漸く破綻の色を帯びてくる。虚栄に彩られ狂気染みた Sheridan の愚行は、Fox の目にも不安を映し出したようである。時を同じくして、ポナバルト対英宣戦の兆し現れた1803年、愛国的情熱に駆立てられ、戦意の昂揚に趨ろうとする Sheridan は、慎重を唱える Fox と意見を異にし、冷淡から不信にまで至るきっかけを作ってしまった。死後、Thanet 卿に、“he would have liked to be placed near Fox.”⁴⁴⁾とまで述懐された Sheridan にとっては、おそらく不本意な敬愛の終りであったに違いない。ともあれ、1812年の落選は、政治的には決定的敗北を以て迫り、懊惱と悲嘆の果てに62才の老人は、己を支える一切の精神的基盤を喪失して、ひたすら飲酒と頹廢の生活に逃れ、生ける形骸の如く世を去ってしまった。前半の華麗な登場にひき較べ、余りに哀れなその終焉も、所詮、Sheridan の政治生活の象徴に他ならないのであろう。

劇作家の終幕として例外ではない。最後の舞台上演劇は1806年の *The Forty Thieves* であるが、劇作家としての経歴は、1779年 *The Critic* で事実上終りを告げたというべきである。その後、折りに触れての詩篇、翻案物、即興的作物等あることはあるが、そのいずれにも往年の面影をみとることはできない。彼自身としては自慢していた *Pizarro*⁴⁵⁾ も、上演的には成功だったようであるが——というのは、フランスとの対抗上その愛国心をかきたてる内容が、当時の世相を反映し観客の好みに一致するという、政治的影響に支配されていたのである——*The Critic* によって、誇張された不自然な偽れる劇を痛罵した Sheridan の、到底ものすべき作ではなかった筈だ。“Truly Sheridan had seized on a dramatic voice of the period.”⁴⁶⁾とは、良い意味でも悪い意味でも言えそうである。時代の要請の赴くままに、上の評言を後者で具現していたことは、少くとも *The Glorious First of June*⁴⁷⁾ の演出ぶりにも充分窺うことができる。感傷喜劇に挑んだあの颯爽とした初登場を思うにつけても、その果敢なさと空しさは一入である。政治を介在させた二重の生活は、私的な生活にまで及んでそのバランスを崩し、内に秘められた芸術家は喪失の一途を辿っていったのであろう。

‘Not you,’ said I to him, ‘You will never write again, you are afraid to write.’ ‘Of whom am I afraid?’ said he, fixing his penetrating eye on me. I said——‘you are afraid of the author of the School for Scandal.’⁴⁸⁾

これは Sheridan の晩年、国王が Drury Lane に *The School for Scandal* 観劇のとき、次の時期についての下問に、現に執筆中と答えた Sheridan が、その翌日 Kelly⁴⁹⁾ と出会って交

した言葉であるという。甚だ示唆に富む挿話である。



さて作品上から、Sheridan の内面に探りを入れようとするに当って先ず問題になるのは、劇は小説のように、その紙面の背後から作者が語りかけるようには、作者を物語るものではない、ということである。即ち、舞台に現れる人物相互の語りかけを客観的に見るだけである。従って、それだけでなくさえ困難な Sheridan の人間追求の試みも、作品の上では尚一層の筆の渋滞を覚悟しなければならない。とりわけ風習喜劇の作家であることが、その困難を一段と倍加することにもなる。それは、つまり、社会生活の習俗・因襲等の愚かしさを、遊離的に描く作家ということになるわけで、心然的に Sheridan の場合にも、個々の人間の内面を見つめない、いわば、敘景のような作品となって現れてくる。社会を反映せる描写として、“His comedies were comedies of society, the most amusing ever written, but merely comedies of society.”⁵⁰⁾であり、登場する人物は human nature による深い省察に彩られたものではなく、いつの時代どこにでも見られる、あの環境や因襲に染まった愚かしさを鮮明にして描かれる。しかも、これに加えて、scene に次ぐ scene を以て魅了するのが Sheridan の特徴であり、その舞台に漂う遊離・軽妙の雰囲気は、“But the lighter drama with which we have now to deal hides no depths under its brilliant surface.”⁵¹⁾を裏付けることにもなる。だが、このことで Sheridan の芸術を一方的におとしめるのは、余りに酷であろう。劇の目的は必ずしも human character の表出だけに限られているわけではない。特に喜劇の場合には、“as a picture of the manners, the feelings, and the language of the class of persons who are painted.”⁵²⁾なることにも意味はあろう。極端な感傷主義の発達のために笑いを破壊されたなかにあって、Congreve や Wycherley に真正の笑いの復活を求め、時流の sentiment に嫌きていた観客の希望に答えるものであったことを考えるならば、むしろ、彼の作風のもたらす長所の側面とも言えよう。ただ何としても、内面的真実を作品に求めることの難かしさは、論を俟たぬところであって、そこに自ら、Sheridan のような作品には、質・量共にかなりの限界のあることは、避けられないのである。

さて、Sheridan の創作活動を追って、一種異様な感じに襲われるのは、前期三作 (*The Rivals*, *The Duenna*, *The School for Scandal*) から、*The Critic* への激変である。前三作は言うまでもなく最も風習喜劇らしい劇の様相を備える。主として Bath での体験に基き、当時の上流社交界の人間群像へ、楽しい皮肉のこもった照射を浴せて現出されたその世界は、後者に至って一転して対象を劇壇に狭め、因襲的蔽に陥った演劇、特に悲劇に嗜虐的な嘲りを試みる。既に、1777年の文名によって劇壇に覇を唱えた Sheridan が、僅か二年後に、劇作家としての己の一切が依拠する劇壇を、何故にこうも無残に、まるで猫が鼠でももてあそぶように、揶揄と皮肉の筆で描かねばならなかったのか。これが最後の創作劇であるだけに、その意味するところは大きい。結果として派生的に生じた事態を考えれば、*The Critic* は theatre の改革に何がしかの寄与を為したであろうし、少くとも、この後長くつまらぬ悲劇の上演を阻止する働きをしたことは争えないが、そういうことを始めから意図して発表されたとは受取り難い。真正面に演劇改革を志向したものとすれば、この後創作の筆を捨て、更に文壇からも去ったに等しい彼の行動は、説明の仕様もない。“Augustan tragedy, the sentimental drama, the incongruity of mismanaged stage effects, all these Sheridan burlesqued.”⁵³⁾との Evans の評言は、それなりで全く異論はないが、同様

に、建設的改革の意図が動機とは受取り難い。悲劇との対決を恐れてきた Sheridan が、無分別な大騒ぎのこの一篇で、悲劇の全滅を志し、いわば、悲劇に対する劣等感が、舞台に対するこのような猛襲を敢てした⁵⁴⁾、と説く Butler の特異な発想は甚だ興味深いが、これを裏付ける直接的動機や実証的事実に乏しい。前三作までにみられる悲劇との不満足な対決を、Butler は例証として掲げるが、それ等は多分に情況証拠的で説得力に欠けよう。しかし、一体に悲劇の凝視を避けようとして行為したかにみえる Sheridan の生涯から受ける印象は、Butler の見方を魅力的にする。劣等感云々の言葉には、何か手掛りのようなものを発見する。所詮 Sheridan は、舞台人たることに終生後めたさを感じていたのだ。何であれ、真面目な改革の意図という方向には、向っていなかったように思う。むしろ、“*The Critic is, of all Sheridan's plays, the one which has least claim to originality.*”⁵⁵⁾ということの方に賛同したい。底の浅い人生観しか持てなかった Sheridan が、己の描く character に託したものは、安易で感傷的な悔悛や恕しだけで、それ等を言い尽すと、さっさと舞台に背を向け去ってしまった、とみる Mrs. Oliphant は、*The Critic* を次のように位置づけるが、これは、Butler や既述 Rhodes の所見⁵⁶⁾と略同じ考えに属するであろう。“*The Critic, so far as the impulse of creative energy, or what, for want of a better word, we call genius, was concerned, was Sheridan's last Word.*”⁵⁷⁾

少年時代からの舞台への嫌悪感に促されて、当時の比較的低い劇作家としての社会的地位に飽足りぬ思いをかこち、軽妙安逸の空気に触れては、とかく人生の深刻に目を伏せ、内面的関心の欠如に猥れて *imagination* の渦渦を招き、己の哀しみも凝視せぬまま、それを罵詈雑言の虚勢に託したのではなからうか。その発表が政界への転換もいよいよ迫った1779年10月であることを考えると、これは文学からの訣別の一篇、内的関心からの意識せざる逃亡でもあっただろう。

次に作品上における統一の破綻という面から、Sheridan の人間を探ってみたい。*The Rivals* に醸し出される雰囲気は、登場人物の気紛れや誇張された馬鹿馬鹿しさを、恬として羞じることもなく芸術の域にまで高めたという印象によって代表される。しかし Sheridan は、同時に、このナンセンスの遊びを最後まで通し切れなかった弱さも露呈する。例えば、Faulkland と Julia の sub-plot にあっては、その評価が感傷主義への調刺であれ、名残りであれ、また main plot の Captain Absolute と Lydia に対する引立役であれ、その登場の場面は悉く感傷主義の粧いを以て描かれる。しかも、危険なまでのこうした傾向は、最終場面に至り、もはやこの作品のよって立つ基調をも侵害するような感傷主義を、Julia によって紹介させている。

Jul. Then let us study to preserve it so: and while Hope pictures to us a flattering scene of future bliss, let us deny its pencil those colours which are too bright to be lasting.—When hearts deserving happiness would unite their fortunes, Virtue would crown them with an unfading garland of modest hurtless flowers; but ill-judging Passion will force the gaudier rose into the wreath, whose thorn offends them when its leaves are dropped!⁵⁸⁾

同様の事情は *The School for Scandal* についても指摘できる。前者に較べ遙かに感傷主義の臭いの少いこの作品でも、最終場面での結びの言葉は、放蕩者の Charles に言わせているだけに、その矛盾を一層あらわに浮立たせる。

Chas. Surf. Why, as to reforming, Sir Peter, I'll make no promises, and that I take to be a proof that I intend to set about it. But there shall be my monitor—my gentle guide.—Ah! can I leave the virtuous path those eyes illumine?⁵⁹⁾

結局, burlesque の持つあの天衣無縫とも言える喜劇精神は, 矛盾相剋を孕む作者の人となりを選び切れなくて, 感傷に逃れ安易な妥協を計った, 即ち, 作者の性格の不調和な一面を露出したものといえよう. 洗練された Wit や火花と散る台詞で眩惑するその筆先が, love scene や serious scene では一向に冴えないのも, 同様に性格上の欠陥からくるものであって, とかく悲劇性の凝視を避けたがる作者の一面は, 己自身の実人生に於ける対決の曖昧さを, 人生の深刻を描くその描写の拙劣ということで, 露呈せざるを得なくされたのであろう.

性格創造の巧拙にも, Sheridan の人間的側面を垣間見することはできそうである. 彼が創造した character のなかで, その描出の優れているものと, 劣っているものを比較してみるとよい. Mrs. Malaprop, Captain Absolute, Acres, Lady Teazle, Joseph の一群と, Faulkland, Julia, Lydia, Maria 達とのそれぞれのグループに共通に感じられるのは, 前者にあっては, 「行動性に富むこと, 華やかな場面での登場が多いこと, 及び深刻な内面心理の表白を必要としない性格であること」等であり, 後者にあっては, 「行動性に乏しいこと, 深刻な, あるいは真面目な場面での登場が多いこと, 深刻な内面心理の描写が必要な性格であること」等が数えられる. 喩えて言えば前者の一群には, 実生活上に於ける Sheridan その人の面影を行動様式の共通性に忍ばせている. 劇構成のなかの一要素として, 複雑に織りなされた人間の営みの裡にあって, 作用し反作用し合い溢れるばかりの行為を伴い躍如たる描写を現出する. 一方後者の面々は, 説明的 situation に留まって行動の停滞を招き, serious な場面が要求する内面心理の描出は, 甚だしく説得力に欠けたものになっている. 例えていうと, 先にも触れたことであるが, 意識的に serious を粧った subplot の Faulkland と Julia は, その意図が何であれ, 喜劇的とも悲劇的ともつかぬ人物描写の不調和のために, 喜劇というジャンルの中では全く失敗に終わったのである. situation によって, ある程度の真面目さ, あるいは深刻を要求される後者の群像が, comic と serious ともつかぬ妙に中途半端な描写に終わったところに, 作者の内心の動きを読みとる鍵がある. 劇なるが故の制約は配慮しなければならぬが, 後者の人間群像の描写に拙劣であったということは, 行為ある人間は描けても, 内面的動きの人間を描くことは苦手とする, ということで, seriousness, 更には tragedy の方向に対する作者自身の対決の弱さは, 無意識裡に, 作品上の欠陥として具現したようである. scene の創造には定評ある Sheridan が, あのドラマチックな体験を以てしても, 《ラブ・シーンには劣る》という評価を確立させてしまったのも, この理由によるのであろう. 従って, 一般的に言って Sheridan は, 集団あるいは群像の俯瞰には優れているが, 個々の人間との真面目な対決には, ひどく劣っているとも言えよう.

最後に笑いの二つの要素, wit と humour に焦点を当てて, Sheridan を覗いてみたい. 風習喜劇の伝統を継ぎ, 主として Congreve に笑いの蘇生を計った Sheridan が, wit によって立つ劇作家であることに異論はない. しかし, wit によって時折り毒されてあることも見逃すわけにはゆかない. 本来が知的で head で造られる wit は, 往々にして, 濫用により dramatic personality の創造に災いをもたらし, 徒らに好みの類型の人間を造り上げ, human character への深い洞察を怠る傾向を招く. また dialogue に特徴ありとする Sheridan は, 余りに過度な wit による sparkling dialogue のために, 却って人間の性格がぼやける蔽害を生み, これ等が共に働いて, 内面的真実に触れる character の創造を, 益々困難にしている. しかし, 彼に humour が無かったわけではない. *The Rivals* は *The School for Scandal* に較べて wit に乏しいが, 少くとも, humour には富んでいる. 本来, 情的で heart で感得される humour が, 最も優れた描出といわれる Peter Teazle に豊かにみられること, また同様に評判の良い Anthony Absolute

にも溢れていることには意味がある、serious であれ、comic であれ、真の人間は humour なくしては描けない。つまり、それは人間存在にとって先天的なものだからである。特に、Peter Teazle の醸し出す笑いは、しみじみとした情感を湛え、遂には寄辺ない老人のその如く、淡い哀感にまで遡って人生の悲哀に訴えてくる。

Sir Pet. So — I have gained much by my intended expostulation! Yet with what a charming air she contradicts everything I say, and how pleasantly she shows her contempt for my authority! Well, though I can't make her love me, there is great satisfaction in quarrelling with her; and I think she never appears to such advantage as when she is doing everything in her power to plague me.⁶⁰⁾

ここにこそ Sheridan の擬視は注がれ、創造の苦悶も今少しここで深められるべきであった。たとえ、手掛けるものが喜劇だけであったにしても……。後矢的、あるいは artificial な wit による character の創造に趨り過ぎ、pathos あるいは tragedy にまで触れてくる humour による character の創造から、次第に遠去かっていった Sheridan に、もはや真の喜劇は期待できることではなかった。感傷主義を排した Sheridan の、一面、警戒すべき点もここにあったようだ。鋭く烈しい witty talk の交換によるドラマとして定評ある *The Critic* が、エリザバス朝以来の幾多の先例に基く、最も創造性に乏しい劇作、しかも、彼の最後の創作劇であったというもの、単なる偶然ではなかった。

成程、個々の character に直接 Sheridan の人間を見ることは、諸家の語るように較率と言えるかもしれない。しかし全体的に見た群像の息吹き、その雰囲気、事件の配し方などにも、作者の人間の現れが皆無などとは断定できるものではない。Charles における放蕩と善意との余りに不統一な描写、Lady Teazle や Joseph の安易な改悛、万事、感傷によりかかった解決の仕方等は、先に述べた Mrs. Oliphant の観察のように、何の深みもない Sheridan の人生観の表われかもしれないが、それはそれなりで、彼の人間を考える端緒にはなるであろう。困難を承知の上で敢て作品を取上げたのも、この理由によるのである。



Sheridan の性格的特徴として、先ず第一に挙げられる矛盾を孕んだ二重性格は、その生活賦の到る処で、主旋律のメロディを奏でている。文学者であり政治家であるということ。劇場経営の財政的手腕とその破綻ということ。Prince of Wales を始めとする上流貴族階級との遊惰乱脈への傾倒と、アメリカの独立、アイランドの自由、フランス革命の擁護、カトリック解放等に一貫する牢固とした政治信条と。また劇作面に於ける不調和な劇作経歴、例えば、*The Critic* の罵倒は、*The Glorious First of June*、*The Stranger*、⁶¹⁾ *Pizarro* の誇張、不自然化された演出によって己に跳ね返り、感傷主義を諷して感傷に安易な解決を求める等、皆同様に Sheridan の性格的な特徴の現れである。

次いで虚栄という悪魔に悩まされ続けた Sheridan が取上げられよう。虚栄、必ずしも常に排斥されねばならぬ悪徳とは限らないが、Sheridan の生活展開にあっては、強力な起動性であると共に逸脱・転落の導火性であったことをも知る。Drury Lane の経営に乗出したことは、その意味で、爾後の虚栄の活躍の場として、甚だ好都合な環境を設定したことになる。政界への突入も、Carlton House⁶²⁾ への接近も、すべて同じである。しかも、*The School for Scandal* によって

不朽の文学者を勝ち得た Sheridan は、英国弁論史上有数の名演説、Warren Hastings の弾劾によって、不朽の政治家を失う端緒をも形造った。賛美する観衆なくしてはやってゆけぬ人間、虚栄に妨げられ、人生の真実を求めて真率の行動に移ることを忘れ、遂には己の魂の安住の場をも失う人間になり果ててしまった。ひたすら飲酒に明け暮れ、亡霊の如くに彷徨した晩年こそ哀れである。クリスマス・ツリーを憧れたあの樅の木のように、“He had desired that evanescent glory to the exclusion of everything else.”⁶³⁾

優美・華麗ではあるが果敢ない世界を取上げて己の芸術を開花させた Sheridan は、自己凝視や内心の葛藤といった内省的厳しさには著しく欠けていたようである。派手な生活行動とは裏腹の、こうした内面的な弱さを、《悲劇に耐えることの怖れ》として、Butler はその伝記のモチーフとして用いた。創作に伴う思索の若しみを避けて芸術を捨て、およそ逆な騒擾の政界へ逃れたことは、その最たる現れと言えよう。また、如何に彼が政治の舞台で巧みな演技に努めても、所詮それが、生の若痛と対峙することの拒否による、《うつろさ》に包まれたものであるならば、あたら希有の才も、政治家としても意外に早く消え去ってゆく己を止める手だてとはならなかった。なまじ才智の衆に抜ん出た Sheridan は、本来ならば、深い省察に最も沈潜すべきときに、虚栄の名声に誘われ、却って才智の支配に屈するところとなった。Drury Lane によって野心に立ち、Drury Lane によって追われた経緯を一番よく物語るのも、このことである。真に喜劇作家たろうとすれば、人間一般に介在する悲劇性にも通じ、更に己の悲劇的一面を直視する気力に欠けてはならない。笑いは抑えても悲しみは制し切れない人間の世界にあって、悲劇は人生の避け難い一面であり、喜劇は人工の所産となる。喜劇に人間の真実を織りこもるとすれば、悲劇性をも凝視できなければならない。時にみられる Sheridan の喜劇に於ける中途半端の介在は、彼の人間に内在する欠陥の蔽い切れぬ露呈となるだろう。

思うに、Sheridan が内心では舞台を忌避していたことは争えないが、彼の全生涯を概観して得た印象は、まさしくドラマのそれである。ここに Sheridan の悲劇性は逆説の様相を帯びて迫ってくる。更に内側から見れば、その最大の悲劇性こそ、己の悲劇性をまともに凝視しなかった態度に発する。外面的な華麗、換言すれば喜劇的な華やかさも、こうした人生の悲劇に対する逃避を策した糊塗策の現れでしかない。少くとも思索的な人間であったとは言い難い Sheridan は、己の発明の才、人柄の魅力、社交の旨さ等に甘えて、その場、その場の衝動に体を交し、思索する代りに、己の苦悩も茶番化によって表わそうとしたかにみえる。このような人生こそ、悲劇の思わざる舞台化に外ならない。

創作活動や劇場経営の初期、また政治家としての初期にも、富や名声への直接的衝動を大いに感じさせるが、政治生活も後半に至っての利害を超えた Sheridan の行動は、前半のそれとは著しい差異をもたらしている。外面の安逸懶惰の行動がどうあれ、Sheridan は年令を加えるにつれて、自己の内在せる悲劇性を、否が応でも、異常な形で外観に表わさざるを得なくされてきた。所謂、常識的な意味では、彼を悲劇的な人間とは呼べないが、その内部に潜在する悲劇性に一顧だに触れないというのは、余りに一面的な捉え方に過ぎよう。彼自身、悲劇からの逃亡者であったのだ。しかも、それすらも意識的、思索的にそうあるのではなかった。それが一層誤解を招き、Harlequin Sheridan を汚名として響かせる要因をなしたようである。現代の社会常識や道德規準からすれば、およそ喧騒乱脈を極めた時代様相は、自ずと、そういう姿勢を執らせるのに力を借したでもあろう。また彼の家庭を取巻く社会環境や、政治家になってからの時代環境が、半面の彼の性格や才能を、こうまで意に反して——おそらく、そんなふうには Sheridan 自身受取っていなかっ

ただろうが——表現させるものでなかったとしたら、後半の政治家としての真率な一面は、既に初期劇作や、その後の全生活のなかで、道化師とはかなり隔たった真面目さで具現されていたのかもしれない。しかし、今は唯、哀しみとの対決から逃れた人間の空しさに思い入るだけである。

注

- 1) E. M. Butler, *Sheridan* (London, 1931) P. 31
- 2) *Ibid.*, P. 64
- 3) Cecil Price, *The Letters of Richard Brinsley Sheridan* Vol. 1 (Oxford, 1966) Introduction xiii
- 4) Mrs. Oliphant, *Sheridan* (London, 1909) P. 95
- 5) *Ibid.*, P. 210
- 6) E. M. Butler, *Sheridan* (London, 1931) Introduction xii
- 7) *Sheridan's Dramatic Works and Life* by G. G. S. (London, 1878) P. 1
 著者 G. G. S. については不詳であるが国会図書館で調べたところによると、本書と同一の出版社 Bohn's Standard Library より、*Sheridan* についての著書 2, 3 冊を出している。
- 8) Thomas Moore, *Memoirs of Sheridan* (London, 1825)
- 9) *Ibid.*, PP. 716—717
- 10) R. C. Rhodes, *Harlequin Sheridan* (Oxford, 1933) Preface x
- 11) *Ibid.*, Preface x
- 12) 同上の書を指す。
- 13) Oscar Sherwin, *Uncorking Old Sherry* (London, 1960)
- 14) E. M. Butler, *Sheridan* (London, 1931) P. 144
- 15) Oscar Sherwin, *Uncorking Old Sherry* (London, 1960) P. 63
- 16) Mrs. Oliphant は、この観点を特に強調している。
- 17) Thomas Moore, *Memoirs of Sheridan* (London, 1825) P. 204
- 18) Mrs. Oliphant, *Sheridan* (London, 1909) P. 127
- 19) Oscar Sherwin, *Uncorking Old Sherry* (London, 1960) P. 137
- 20) Rt. Hon. Charles James, M. P.
- 21) Rt. Hon. Edmund, M. P.
- 22) Oscar Sherwin, *Uncorking Old Sherry* (Lond, 1960) P. 298
- 23) Mrs. Oliphant, *Sheridan* (London, 1909) PP. 129—130
- 24) afterwards Prince Regent and King George IV
- 25) Thomas Moore, *Memoirs of Sheridan* (London, 1825) P. 275
- 26) Rt. Hon. William, M. P., Prime Minister
- 27) Thomas Moore, *Memoirs of Sheridan* (London, 1825) PP. 547—548
- 28) *Ibid.*, P. 600
- 29) *Ibid.*, P. 706
- 30) R. C. Rhodes, *Harlequin Sheridan* (Oxford, 1933) P. 196
- 31) *Ibid.*, Preface ix
- 32) E. M. Butler, *Sheridan* (London, 1931) P. 89
- 33) *Ibid.*, P. 185
- 34) *Ibid.*, P. 89
- 35) *Macbeth* V, S. C., 24
- 36) Thomas Moore, *Memoirs of Sheridan* (London, 1825) P. 254
- 37) 大野真弓編「イギリス史」山川出版 1967

- 38) Mrs. Oliphant, *Sheridan* (London, 1909) P. 148
- 39) *Ibid.*, P. 188
- 40) E. M. Butler, *Sheridan* (London, 1931) P. 289
- 41) R. C. Rhodes, *Harlequin Sheridan* (Oxford, 1933) PP. 155—156
- 42) Oscar Sherwin, *Uncorking Old Sherry* (London, 1960) P. 263
- 43) *Ibid.*, P. 227
- 44) R. C. Rhodes, *Harlequin Sheridan* (Oxford, 1933) P. 254
- 45) 1799年初演, ドイツ劇作家 Kotzebue の翻案物
- 46) Allardyce Nicoll, *A History of English Drama* (III) (Cambridge, 1955) P. 217
- 47) 1794年初演, 厚紙で造った艦隊の登場をみる.
- 48) *Sheridan's Dramatic Works and Life* by G. G. S. (London, 1878) P. 198
- 49) Michael Kelly, Irish stage manager and music seller
- 50) Hippolyte A. Taine, *History of English Literature* (II) (New York, 1965) P. 439
- 51) Mrs. Oliphant, *Sheridan* (London, 1909) P. 57
- 52) *Sheridan's Dramatic Works and Life* by G. G. S. (London, 1878) P. 70
- 53) Ifor Evans, *A History of English Drama* (London, 1950) P. 112
- 54) E. M. Butler, *Sheridan* (London, 1931) P. 90
- 55) Mrs. Oliphant, *Sheridan* (London, 1909) P. 100
- 56) 注 31)の引用参照
- 57) Mrs. Oliphant, *Sheridan* (London, 1909) P. 114
- 58) *The Rivals*. V, iii
- 59) *The School for Scandal*, V, iii
- 60) *Ibid.*, II, i
- 61) 1798年初演, ドイツ翻案劇, 上演的には大成功.
- 62) Prince of Wales の居所
- 63) E. M. Butler, *Sheridan* (London, 1931) Introduction xii